東九州支部報

第72号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2016年1月25日(月)発行

２７年忘年会（１２月１２日(土)・宇佐市「はちまんの郷」にて

目　　次

支部活動報告		個人投稿	
鹿嵐山と八面山と忘年会	2	より安全な登山のために(19)	11
鬼落山と御許山・雲ヶ岳	2	ペンリレー(19)「分岐点の奥穂高登山」	12
天草の山(龍ヶ岳・倉岳・太郎丸・次郎丸)	3	三角点と山城探訪シリーズ(16)	13
清掃登山とあせび小屋合宿	4	私の無名山ガイドブック(59)	14
宮崎エストン祭と親父山・障子岳	5	会務報告 支部長会議報告	15
大船山ミヤマキリシマ保護活動	6	会務報告 110周年記念式典・年次晩餐会	15
涌蓋山・喜寿お祝い登山	7	会務報告 年次晩餐会山行・パノラマ台	16
山岳会青年部の初山行	8	特別寄稿　槍ヶ岳北鎌尾根紀行	17
山の日制定記念親子登山	9	お知らせ	19
登山入門教室実践講座山行	9	後記	20

鹿嵐山と八面山と忘年会

宮 原 照 昭（10912）

今年の忘年会は、２日間で4山を登るとのことなので気合を入れて朝目を覚ました。天気だ！２日間頑張ろう。

１２月１２日（土）朝7時に大分駅南口集合組は車4台、１４名で大分から高速に乗り、速見インターで降り朝9時前に鹿嵐山(かならせやま)の第1登山口に到着。支部長は毎年大阪から参加している重廣さんと関西支部からのお客さん２名を載せて到着。そして別府組も到着した。全部で車8台だ。先ず車2台が第2登山口に行き、1台置いて帰ってきた。それが到着するとすぐに出発。8時３０分過ぎ、第1登山口を２５名で出発して先ず雌岳へ。急な登りを約1時間で雌岳山頂へ。大きな石の祠があった。そこから一旦鞍部へ下り、雨上がりの滑りすい急な道を登れば雄岳山頂だ。1等三角点がった。みんなけしきを楽しみ、記念写真を撮って下山開始。

（鹿嵐山雌岳山頂にて）

足場の悪い急な下りはすべりやすく、時間をかけて慎重に下る。そしてやせた岩稜が連なる万里の長城と言われるコース通って地蔵峠に到着する。地蔵峠には、その名の通りお地蔵さんが祀られている。お地蔵を拝んで弁当を開く。冷たい風が吹いて寒いので２０分たらずで食事を済ませ、下山開始。１時３０分過ぎには第2登山口に到着。

次は八面山だ。それぞれ便乗して車8台が連なって移動開始。まずは八面山の展望台に到着。天気が良く、中津市街が見渡せて展望が素晴らしかった。それからアンテナまで移動し三角点のある山頂へ山行再開。頂上で記念写真を撮り、さっき登った鹿嵐山方面の展望を楽しんだあと、大池などを散策しながら車へ。

午後4時に今夜の宿宇佐市（はちまん郷）に到着。温泉に入り、１８時から、宴会に入る前に重廣さんの講話。火山活動と登山のあり方など。異常な事態に対して逃げ遅れてしまうのはあり得ないと思う「正常性バイアス」が働くからだ・・・、

（八面山三角点山頂にて）

などの話が興味深かった。そして、登山の基本とザックに入れる装備などの説明があった。

そのあと忘年会へ。夕方からの参加者など含めて全部で３５名だ。その中には関西支部からのお客さん２名も加わっている。首藤さんの乾杯で開会。年に一度のおお盛り上がりだ。そして２次会も部屋で盛り上がったが、明日は2山登る予定なのですぐ就寝する。

鬼落山と御許山・雲ヶ岳

岩 崎 眞 琴（会友）

忘年登山2日目は鬼落山（おにおとやま）宇佐市にある山だ。宿舎のはちまんの郷を午前8時に２８名、１０台の車に分乗して出発。途中のコンビニなどでおのおの昼食を買って登山道入口にある八幡神社へ。ここから奥は林道で、登山口には車が沢山おけないのでここの駐車場に置く予定だったが、ちょうど神社の祭礼と重なり駐車できず、地元の人の誘導で脇の農道に5台置いて、あとの5台にみんなが乗り込んで登山口迄行く。草の生い茂った荒れた林道を、車はどんどん上って林道終点へつき、出発準備。その時、女性二人を八幡神前に取り残したのに気づき、急いで小型車で迎えに戻るというアクシデントもあった。

午前9時、準備運動後登山開始。雨のあとの影響か、登山口から続くつづら折りの急登は、ずるずると滑りやすく、朽ちた竹や倒木があり歩きづらい。日当たりが良くないのか周りの石は苔むしていた。登山口から３０分以上かかりやっと三角点の峰と本峰との鞍部についた。

鞍部から左に鬼落山頂へ向かう。傾斜はいっそうきつくなり、滑らないように木の幹につかまりながら急坂を上ると、初日に登った八面山や鹿嵐山が見渡せる露岩に辿り着いた。露岩からさらに急な登りで午前１０時２０分、山頂に到着。標識は小さく、周囲には樹木があり展望は全くなかった。記

（鬼習山山頂にて）

記念写真撮影後下山開始。下りは登り以上に神経を使う。

慎重に下って１１時半登山口に着くが、昼食は御許山(おもとさん)登山口でとることになり、また連なって移動。正覚寺集落を通り、駐車場のある大元山登山口へ。着いたらまずは腹ごしらえの弁当。登山口からは、植林したヒノキ林を進む。緩やかな登りが続く。しばらく進むとジグザグの登りとなり、１５分程登ると御許山山頂が見えて来た。雲ヶ岳への分岐点(地蔵の峠)をすぎると緩い下りの後、緩く登って、林の中を登り詰めると宇佐神宮の奥宮、大元神社の社殿の前の山頂広場だ。１２時２０分過ぎ、何と山頂の標識は広場の大銀杏の御神木(台風で倒れた)の傍にあった。奥宮へは直接参拝できず、大元神社の拝殿を通して拝む形をとっている。

記念写真撮影後すぐに下山開始。途中の雲ヶ岳へは地蔵の峠から２０分程ほどの登り。１３時３０分雲ヶ岳山頂へ到着。山頂は灌木に囲まれ、高田市街地の方だけ切り開かれている。広い山頂の中央に１等三角点があった。

登山口に下山後、関西からのお客さんたちを見送って現地解散。今回、初めて県北の山に登ったが、歴史的な背景など興味深く思える事がたくさんあり、爽清らしい景観と個性ある山を楽しむ事ができた。鹿嵐山はツクシシャクナゲの群落が見られるので、開花時期に訪れてみたい。

（御許山大元神社奥宮社殿前にて）

☆忘年登山・忘年会の参加者：加藤英彦・飯田勝之・木本義雄・久保洋一・中島洋祐・阿部幸子・宮原照昭・工藤吉子・若月美智子・土屋多貴子・遠江洋子・宮本真理子・池辺明美・柴田寿一・岩崎真琴・松浦一幸・丹生浩司・久知良美登里・関西から重廣恒夫・宗實慶子・橋本圭之助の３名

☆忘年会までの参加：石神美智子・櫻井依里・尾家暁夫

☆忘年会と２日目参加者：野村芳雄・牧野信江・浅野総一・渡辺千代春・渡辺和子・石川洋祐

☆忘年会のみ参加：西孝子・首藤宏史・阿南寿範・小竹初美

☆２日目参加者…賀来和子・木下恵子

付記　毎年ゲストで出席の重廣恒夫さん（現本部監事・前関西支部長）は鹿嵐山登山の２日前に神戸から大分入りして、七ツ石山・経塚山・万年山・伐株山・角埋山・大岩扇山・宝山などに支部員が同行して登った。氏のチャレンジ４０００山めざす山登りは、御許山を終えて１６３７山を踏破したことになったとのことである。

天草の山（龍ヶ岳・倉岳・次郎丸嶽・太郎丸嶽）

１０月月例山行報告

芝田寿一（会友162）

１０月の月例山行は天草の山、倉岳、龍ケ岳、次郎丸嶽、太郎丸嶽です。１０日7：00大分駅出発、戸次に全員集合の計画だった。Ｉさんは日にちを間違えてまだ寝ているところにＡさんが迎えに行って気が付き慌てて準備、男ならではの早業。若干の遅れはあったが全員そろって出発できた。車4台、１８名の山行です。

飯田車が先導し途中道の駅すごうと大津で小休止、国道57号線を直進すると熊本の中心部を通り、混雑するので脇道に入り御船I.Cから松橋I.Cまで高速を使って時間を短縮した。天草パールラインを通って、途中のスーパーマーケットで今夜の食材と昼の弁当を調達して、天草最初山、龍ヶ岳へ。国道266号から7.5ｋｍ、18分走って13：10龍ケ岳山頂駐車場に到着、山頂からは八代海と島々がかすんで見えていた。山頂からの眺望を楽しみながら山頂で弁当をいただいて次の倉岳に向かった。18Km、38分車で走って倉岳山頂の駐車場に14：27到着、駐車場から鳥居を通って頂上に到着、倉岳は天草の最高峰682.2mここで記念写真を撮って散策すると倉岳延命登山道の案内板があった。この道を歩いて登りたかったな～。歩いて登れば寿命が延びるかな？

このあと今日の宿は竜洞山みどりの村キャンプ場へ移動だが、途中で支部の大先輩の茅野さんを訪ねて聖和園に立

ち寄った。１か月後には大分に戻るとのことだ。

キャンプ場へは倉岳から51Km約2時間のドライブ16：34みどりの村キャンプ場に到着、早速、料理班長遠江さんを中心に我が支部の名物‘東九州鍋’ができ上がり、ひと鍋分を全員によそおったらすぐに次の鍋に取り、掛かりお代わりに対応していた。それがはけると３鍋目に取り掛かる。ほかに、サラダ、漬物、焼きなす（阿部さんが冷凍して持ち込み）食べきれない程のごちそうです。アルコールが回って次々に布団に潜り込んでいきます。私も明日も車の運転があるので早めに就寝、何やら子守歌ではないけれど聞こえてきましたが睡魔に負けました。

次の朝、外は濡れていた。昨夜かなりの雨が降っていたそうだ。ぐっすり眠っていて気が付かなかった。料理班長の遠江さんは早起きして朝食を作ってくれていた。雑炊と昨夜の特製東九州鍋の残り、納豆、海苔、焼きなす、漬物etc etc たしか　就寝は最後の方だった（お酒が回って盛り上がっていた）ホントに　いつも　美味しいものを作っていただいてありがとうございます。

下川さんが依頼していたと言う天草出身のＳさんがガイドで到着。6：53発車、ロザリオラインを通り46Km　55分車で走って次郎丸嶽登山口に到着、準備して8：12次郎丸嶽に向けて出発、海抜5ｍからの登山なので最初は里山歩きの雰囲気です。9：02 太郎丸分れに到着　先に次郎丸嶽へ行きます。イナズマ返しの急登を過ぎると次郎落としの難所、巨大な岩が待っています。ですが滑らない岩なので見た目より簡単です。

この岩の上からは天草の山と海の絶景が見渡せます。正面手前の山が太郎丸嶽で３つのピークの真ん中が山頂です。一見右のピークは山頂に見えるがそうではありません。よく間違ってここが山頂だと思ってここからＵターンする人がいるとのことでした。しばらく行くと次郎丸嶽の山頂が見えてきました。9：45 山頂に到着、天草の海と山360度の展望を楽しんだ後記念写真を撮って、太郎丸嶽へ向かいます。太郎分れからの道は草木に覆われたところが多くこちらに登る人が少ないのかと思われました。よく頂上と間違えるというピークを超して、10：44太郎丸嶽に到着、青空が広がり景色がより一層きれいに見えました。次郎丸嶽を背景に記念写真を撮って帰途につきました。

今回の山行は天気に恵まれたがキャンプ地が遠く車での移動に多くの時間を費やし山に歩いて登る時間が取れなかったのが残念でした。

参加者　下川（CL）、久保（SL、車）、星子、飯田（車）、阿部、小野、池永、渡部、石川、遠江、池辺、芝田（車）、岩崎、清水、松浦、木下、丹生（車）、久知良

（上：次郎丸嶽山頂・下：太郎丸嶽山頂・背後に次郎丸嶽）

清掃登山とあせび小屋での合宿

丹 生 浩 司（会友 187）

１０月１７日・１８日清掃登山とあせび小屋合宿に参加。今年のルートは男池から大戸越を経て坊がつるのコース。大分駅南口に１２名が集合、近くのスーパーで食材を調達し３台の車で出発。芝田車は途中田内で工藤さんと合流。田内柿原から阿蘇裾野方面に向かう、黄金色の稲が美しい。カーブの多い狭い道を登っていくと黒岳、平治岳が見え、山の中腹まで紅葉がおりてきている。ほどなく駐車場につき男性は重いもの、女性は軽い食材をザックに詰めるが今まで担いだことのない重さでいささか心配になる。

１１時、入り口で一人１００円の清掃協力金をまとめて支払い原生林の中へと入っていく。途中男池の湧き水を頂戴し、かくし水でも頂いていく。ソババッケでちょうど１２時となり昼食、重いザックをおろすとほっとする。少し休憩してまた大戸越をめざし一歩一歩高度を上げてゆく。１３時４０分やっと大戸越、ここで休憩。紅葉した九重の山々がまわりに見えとても景色のいい所だ。あちこちに登

山者の姿も見える。

１日目最後の踏ん張り、あせび小屋めざし重いザックを担ぐ。途中赤く染まったもみじが疲れを癒してくれる。坊がつるの草原には色とりどりのテントが張られ、その間を縫うように歩き１５時あせび小屋到着。

テーブルにザックの中の食材を並べると、女性たちが遠江さんの指示のもと料理に取り掛かる。男性二人も広間で果物の皮をむき、残りの男性は窓を開け部屋の掃除、布団敷と皆で手分けする。

法華院温泉に行って汗を流す。さっぱりとしてとても気持ち良い。１８時、女性たちが作ってくれた料理で食卓を囲み夕食の始まり。すき煮、サラダ、ピーマンと砂ずりの炒め物、キュウリの漬物等々どれもとても美味しかったです。遠江さんありがとうございました。お酒も進み時間を

忘れるほど楽しく最後は加藤支部長のもと歌で締めくくりです。外は満天の星空、岩崎さんに教えてもらいながら星座の勉強もしました。明日は大船の頂上で日の出を見るため早目に床に就く。

１８日、午前3時３０分起床。身支度を整えヘッドランプをつけて４時出発。外は暗く空は満天の星、山の中腹にライトの帯、もう山頂めざし登っているようだ。坊がつるには霜が降りライトに照らされキラキラと輝く。テントの間を縫って登山口へ、早速の急登、でこぼこの登山道を登っていく。振り返るとライトの帯が出来ている。途中１回の休憩の後９０分弱で段原に着く。ここから山頂までは約２５分、山頂にはライトの明かりがちらほら、もう先客がいるようだ。途中朝焼けの何とも言えない赤の綺麗さに思わず感嘆の声が出る。しっかりと目に焼き付け山頂直下の岩に手をかけ登る。２時間で山頂到着。

東の空が少しずつ明るさを増していく、日の出までもう少し。6時１５分待ちに待った瞬間、遠い山の稜線から光の筋が見え太陽が顔を出す。見る見るうちに明るくなり山々を照らすと、景色が刻々と変わり山頂一帯の紅葉が映し出され、四国、宮崎、熊本、福岡の県境の山々まで見え素晴らしい眺めである。数人で御池まで降り写真を撮って山頂で待つ支部長の所へ集合し下山する。明るくなった坊がつるは一面銀世界が広がっていた。

8時、あせび小屋到着。一人残ってくれた遠江さんは朝食の準備と１３名分の弁当を作ってくれていました。頭の下がる思いである。後片づけと清掃をして下山に取り掛か

（あせび小屋前で）

る。支部長と女性２名は吉部コースを清掃しながら下山。残り１０名は来た道のゴミを拾いながら下山。大戸越への登り口に一人一石の看板あり、石を拾いぬかるんだところに置いていく。大戸越に着き休憩。

ここでは飯田さんを囲んで地図とコンパスの使い方を教えてもらう。一休みして下山開始。ソババッケで昼食。遠江さん手作りのお弁当をいただく。ごちそうさまです。美味しかったです。かくし水でおいしい水を頂く。植物の葉にある白い線の不思議を飯田さんから教えてもらいながら原生林の中をしばらく歩いて駐車場に到着。芝田車は吉部方面に３人を迎えに、他の２台は大分に向けて出発し帰宅の途につく。

今回は今までにない心に残る山行でとても楽しかったです。皆さんありがとうございました。

参加者…加藤・飯田・宮原・工藤・土屋・遠江・芝田・岩崎・尾家・松浦・柳瀬・丹生・久知良

宮崎ウエストン祭と親父山・障子岳

１１月月例山行公報告

塩 月 靖 浩（14952）

ウェストン祭

１１月２日、日本近代登山の父として知られる英国

人ウオルター・ウェストン氏を偲び、山岳遭難者に哀悼の意を表し登山の安全を祈る第３１回宮崎ウェストン祭に参加した。

日時：11月2日16時～16時30分／五ヵ所高原三秀台

主催／高千穂町、日本山学会宮崎支部。後援／高千穂町観光協会、田原地区村おこし推進協議会

式典　○点鐘(ウェストンの鐘)　○ウェストン碑献花
　○詩朗読(ウエストン氏に捧ぐ鎮魂と新たなる誓い)
　○ウェストン氏にまつわるお話　○関係者挨拶
　○ウェストン祭の歌合唱

＊ウェストン氏は日本アルプスに登頂する前年1890年(明治２３年)11月6日に祖母山頂に立っている

＊三秀台；祖母山、阿蘇山、久住山の三つの秀峰にちなんで名づけられた

式典終了後五ヵ所野菜出荷センターで交流会が行われた、神事の後、神楽、キャンプファイヤー、田原地区女性部の踊り、本陣太鼓とにぎわった、冷たい夜風の中、カッポ酒(焼酎)と、うどんがとりわけ美味であった。８時より公民館に移動し、日本山岳会だけの交流会が行われた。九州５支部より５７名の参加でおおいに飲み、語り、歌い、懇親を深めた、宮崎支部会員の心こもる歓待に感謝、感謝！。

参加者…加藤、飯田、宮原、桜井、工藤、若月、土屋、塩月

親父山～障子岳（１１月月例山行）

１１月３日(火)快晴。今月の月例山行の当初予定は、祖母山の北谷から黒岳へ登るコースだったが、雨の後で、北谷の渡渉の困難さを考慮して、ウェストン祭記念紅葉観賞山行に参加となった。３日早朝到着組も合わせて１３名。宿泊の五ヵ所公民館を８時出発、四季見原登山口に移動、９時４０分登山開始、各支部参加、７６名の大パーティとなる。親父山はその名のとおりその昔、クマがよく出没したという深い山であり、ブナ、モミ、カエデ等の巨木が多い、黒岳分岐を経て１１時２０分、親父山山頂(1644ｍ)到着、三等三角点、山頂で一応九州５支部の解散式。その後、東九州支部は障子岳を目指す。急斜面を下りた鞍部には、1945年8月30日にアメリカ軍のＢ－２９が濃霧と雨により障子岳の尾根に接触後墜落炎上し、１２名の犠牲者と同月7日の日本人操縦士の痛ましい事故の慰霊を込めた説明板が設置されており、説明板の柱には墜落機のプロペラの部品が使われ、戦争の悲惨さを今に伝えている。

１２時、障子岳山頂（１７０９ｍ）、山頂は祖母～古

（親父山山頂にて）

祖母～傾の縦走路に有り、３６０度大パノラマで、北に祖母の雄姿、目の前に天狗岩、右手に古祖母、本谷、傾、左手北東には祖母山から障子尾根の稜線、西の方向に阿蘇山もはっきりと確認出来る、紅葉と絶景のまっただ中で昼食を取る。宮崎との県境側よりの祖母傾山系を見るのは初めてのことで至福の時を過ごす。

狭い山頂を後から来た他の支部に譲り、１２時３０分下山開始、親父山よりは、南へ四季見キャンプ場への道を迂回して下る組と、往路を下る組とに分かれる。下山後、五ヵ所公民館で集合後し、そこで東九州支部は解散、車6台で大分に向かう、大分着１７時３０分。

参加者：加藤、飯田、宮原、桜井、工藤、若月、土屋、丹生、久知良、清水、柳瀬、井上、塩月

ボランティアも「継続は力」

大船山ミヤマキリシマ保護活動に参加

小野則夫（会友14952）

１０月２２日、大船山のミヤマキリシマ保護のための支障枝除去作業に支部会員・会友５人とともにボランティア参加をした。参加の呼びかけがあったとき、連日の晴天が続いている中で、くじゅうの素晴らしい紅葉情報もテレビで連日報道されており、平日の行事ではあったが、期待感をもって二つ返事でＯＫをした。

当日は、大分駅東の貸し切りバス待合いブースに7時20分集合。誰一人遅れることなく予定どおり出発した。冒頭の添乗員の挨拶を聞けば、今日のバスの運行はＪＴＢの主催で、このボランティア活動は何年も継続されているとのこと。

出発時は、PM2．5か朝霞か分からないけれども、ぼんやりとした景色が続いていたが、野津原を過ぎ、奥地産業

道路を上り詰めたあたりから、快晴の空に浮かび上がる九重連山が見えてきた。

程なく集合地点のパルクラブに到着、本日の行動や日程説明等を地元案内人から受けた後、参加者約５０名が、４台の大船山行きマイクロバス等に分乗して出発。バスは板切の牧野道を上っていく。最近竹田市が開いた登山バス運行道路で、通称“空”と呼ばれている牧野を上っていく。バスに揺られて間近に迫りつつある大船・稲星の山容を見ながら、約２０分。バスの終点の新しい池窪登山口に到着。

地元の久住みちくさ案内人クラブの案内で、バス停から新しく作った登山道に沿いながら全員が一団となって、ボランティア会場の大船山頂を目指して出発する。標高を上げるに従い、南には予想外に噴煙を上げていない阿蘇の遠望、祖母、傾山の山並み、北には渥木の茂みから黒岳の中腹を望みながら、快適な天気に恵まれ途中、二度の休憩を経て昼前には山頂に到着した。

昼食の後、ヤマキリシマの保護活動開始。平日にもかかわらず、年配の方々を中心に多くの登山者が登頂、山頂で記念撮影の真最中、私たちのボランティア活動に対する感謝の言葉も頂く。少し時期は下がっているものの何年ぶりかに見る山頂の御池まわりのドウダンツツジの見事さを堪能しながら、作業に集中し、一時間程度で終了。

（作業を終えて・大船山山頂にて）

また帰路の途中に、鳥居窪のちょうど盛りと思える紅葉を眺めた後、一休憩のなかで、豊後岡藩三代藩主、中川 久清（隠居後「入山」と号する）の墓である入山公廟（にゅうさんこうびょう）を竹田市観光課職員の説明を受け、手入れの行き届いた墓地に墓参りをする者もいた。近々墓地の修復工事をするそうで、工事用のモノレール取り付け工事が行われていた。

下山開始後、約２時間後の３時半過ぎには、帰りの迎えバスの起点まで戻り、往路のそのままをピストン、パルクラブへ。大地の湯で炭酸泉のお風呂にゆっくり浸かりながら、また、大分までバス車中の心地よさであった。

今回の活動を通じて感じたのが、竹田市が、大船山登山に利便を図るために登山バスを中腹まで、一日３便往復、一般登山者に無料で提供していること、久住みちくさ案内人クラブや市役所を始め地元の人たちが、大切に守っているこれらの自然・資源を、登山するものとしては、永遠に感動が得られるように久住の山々を大切に守らなければならないことと、また、今回のJTBの皆さんの活動、「継続は力」の精神が大切であることを感じたボランティア活動であった。

参加者：飯田、渡部、石川、遠江、小野、芝田

涌蓋山・喜寿お祝い登山

飯田勝之（10912）

１１月１日（日）は今年の喜寿を迎える甲斐良治（8940）後藤実（14095）渡部昭三（会友２）三氏のお祝い登山である。午前９時に涌蓋山登山口のひぜん湯に集合。全部で２９名の会員・会友が集まった。最長老の星子さんを先頭に出発。稜線までの登りは深いカヤに覆われた道だが、夏の終わりに綺麗に刈り開かれていて、実に快適に登ることができた。

稜線に登りつくと草原で広々と展望が開ける。天気は上々、しかし残念なことにＰＭ２．５でもやっているが、めざす涌蓋山が巨大な姿でそびえている。その山体に向かって広い草の稜線に長い列が続く。涌蓋越から樹林の中に入り、林を抜けると急な登りで列がばらけてくる。各々が一歩一歩の登りで、やがて雌岳だ。ここでひと息入れて最後の一踏ん張り。転石の多い急斜面を登りきると広々とした山頂は、九重連山の大展望台だ。

（涌蓋山山頂にて・支部旗と木山さんの書を囲んで）

１１時４０分到着。標識の前で支部旗と会友の木山さん作のお祝いの書を囲んで記念写真を撮る。あとは昼食、ちょうど正午だ。西風が強くて冷たいので、みんな風を避けて草むらの低いところに思い思いの場所をとって弁当を開く。

１２時４０分下山開始し、みそこぶし手前の広い草原で一旦ゆっくり休憩したあとひぜん湯めざして下っていく。１３時５０分、ひぜん湯着。温泉宿のあった跡の広場でもう一度木山さんの書と一緒に記念写真撮影。そしてみんなオーナーの甲斐良治ご厚意で、八丁原ヴューホテルの温泉で汗を流して帰途へ。

有志で行われた夜の八丁原ヴューホテルでの懇親会。その夜のためにわざわざ参加の４名を加えて11名、和やかに、賑やかに三氏の喜寿の祝宴をくり広げた。

参加者：甲斐、後藤、渡部（以上喜寿）加藤、星子、飯田、木本、園田、久保、佐藤(善)、中島、安部、石川、長野、今山、尾家、岩崎、賀来、木下、丹生、久知良（別に府内山岳会７名）

懇親会：甲斐、後藤、渡部（以上喜寿）加藤、西(孝)、阿南、安藤(幹)、安藤(セ)、飯田、小竹、石川

山岳会青年部の初山行

賀来浩子（会友）

１月１日、日曜日、午前６時３０分に七瀬川自然公園駐車場に５名が集合し、九重花公園付近で宇佐から参加の方と合流。山岳会青年部の今回の参加人数は男性３名、女性３名の計６名でした。

合流後、沢水登山口に向かい午前８時２０分に出発。緩やかな道から徐々に大きな岩が増えて、険しい道に入って行く。天気は良かったもののなかなか登山者に遭遇しないまま、一度９時１２分に休憩。ここで男性メンバーの方から、チョコやナッツ、アーモンド、くるみ、レーズンなどをご自分でミックスして持って来られていたものを少し食べさせて頂きました。次回の登山の際には自分も真似したいほどとても美味しいものでした。１５分ほど休憩して９時３０分再出発。紅葉の盛りは過ぎたものの、まだ見頃の場所もあり、紅葉を楽しみながら進んでいくことが出来ました。

１１時分岐。１１時１７分に稲星山山頂に到着。そこで風をしのげる大きな岩のもとでお昼休憩。１１時４０分に再出発。神明水へ行ったが水が枯れているようで飲んだりすることが出来ず残念。１２時３０分、分岐。１２時４０分、白口岳山頂到着。大きな岩を下って行く際にずっと体が強張ってました。１３時３０分鉾立峠到着。枯れ葉の落ち葉で埋め尽くされている場所ばかりで、落ち葉の下に隠れている大きな石に足を取られる為、進んでいくのが困難でした。１４時４５分くたみ分かれ到着。

１５時１０分沢水到着。くたみ分かれから沢水までの間に小雨が降り出しましたが、本格的に降り出す前に無事下山することが出来ました。

私事ですが、初心者向け登山入門教室講座の記事を新聞で見つけた母と一緒に講座に参加させて頂き、実践講座で初めて本格的に登山を経験しました。初心者の為、経験することが新鮮なことばかりで、怖い場面もありましたが楽しいことも多かったので、母と一緒に日本山岳会に加入しました。皆さんと登山すること

により学ぶことばかりで、ちなみに今回の登山では２リットル近くの水分を持参するようにということでしたが、２リットルのペットボトルのみを調達してしまい、登山直前に飲むときに面倒になることに気づき、慌てて５００ミリリットルのペットボトルの水を購入することになりました。また登山中何度も、“あともうちょっとあともうちょっと”と声をかけて頂きましたが、“もうちょっと”を１０分くらいの距離と考えていたら、３０分以上はかかる距離だったりと、普段の“もうちょっと”と同じくらいに考えてはいけないということも学びました。次回からは学んだことを活かし登山を楽しめるよう励みます。

青年部の設立については、４９歳未満の支部員を対象にして、7月３０日に準備会を開き、9月2日に該当者だけで今後の活動等を相談。その中で「まずはみんなで山を歩いてみよう」ということで最初の山としてこの報告山行が計画されました。青年部の当面の目標は一緒に祖母・傾を縦走することめざし、そのための練習山行などを重ねていくとのことです。

「山の日」制定記念

大船山親子登山への同行支援(再掲)

園 田 暉 明(13135)

8月１１日、「山の日」制定記念行事の一環として行われた、竹田市主催の「大船山親子登山」へ補助者として支部から木本義雄さんと共に派遣され、県山岳連盟員、同市消防士の方々と共に登山に同行することとなる。当日朝、木本さんの車で大分市を出発し、集合場所である竹田市直入町有氏の「パルクラブ」駐車場に到着。登山参加者は地元直入地町小学校６年生７名にその母さん方を加えた１５名、それに竹田市職員に我々補助者の総勢２３名である。

午前７時４０分、観光登山バス等に分乗し標高１，１００メートルの大船山・入山坊廟登山口に向かう。この道路は、牧場内にあった道路を大船山山麓方面に新設延長したもので、本年6月から予約制で観光登山バスが運行しているとのこと。登山口に到着後、全員で体操を済ませて、

午前８時に登山開始。列の先頭と最後尾、それに中間の適宜の位置に我々補助者が入る。

ここから入山坊廟入口少し手前までは新設されたコースで、リョウブや馬酔木の灌木が日差しを防いでくれ涼しい。中間の一部草原となった地点で最初の小休止を取る。入山坊廟に到着し、市職員による廟の説明を聞きながら大休止。入山坊廟から児岩の間は、傾斜も急となり、大きな石が目立つようになる。子供は元気であるが、お母さん方の喘ぎがひどくなり、立ち止まりを繰り返しながら進む。児岩での大休止では、眼下の久住町中心部や岡城方面への遠望を親子が楽しんでいた。

児岩から先は、何度も大石に這い上りながら進む一番の難所。その中で所々にある、シモツケソウの紅色の花にお母さん方からキレイ、キレイの声。苦しさから心が解放されて、元気を取り戻す一瞬である。

９合目あたり、台地状の地点に入ってコースが平坦と

なってからは歩みもスムーズとなって、１１時丁度、全員が無事に山頂に到着した。

登頂に感激し、手を取り合い歓声をあげる親子達。青空の下、山頂から眺めるくじゅうの山々や眼下の坊がつる等は実にきれいで、正に我のグループを大船山が歓迎しているような山頂であった。

昼食を済まして１１時４０分、往路と同じコースで下山開始。子供たちは集団となり先頭を行き、疲労が足に来ている様子のお母さん方がゆっくり遅れながら続く。入山坊廟の少し手前では、ヒヨドリバナに群がるアサギマダラが一斉に舞い上がる珍しい光景に遭遇。姫島に毎年、沖縄あたりから飛来することで話題になっているあの蝶である。下山は順調に進み、１度大休止を入れただけで１４時に全員が登山口に到着。故障者なし。出発時と同じ車を利用して、出発地の駐車場に着き解散する。子供たちの思い出となるであろうこの登山に、同行出来たことに喜びを感じる１日であった

この報告原稿は9月に載き、７１号に掲載しましたが、印刷のためにデータ転送時に何らかの関係で、文節の落丁等がありました。そのため今号で再度掲載させて頂きました。

千灯岳と泉水山・黒岩山・三俣山

登山入門教室実践講座終了

飯 田 勝 之（10912）

今年の登山入門教室は９月からの４回８課程の座学講座を終えたあと、11 月 14・15 日の横岳キャンプと千灯岳登山、12 月 19・20 日の九重ヒュッテの合宿と九重山登山を終えて、予定の全課程を終了した。

１１月１４日(土)午後３時、雨の中を横岳キャンプ

場に受講者１１名が集合。(雨天のため直前に２名不参加) 受付・オリエンテーションのあと、講師の興田副支部長がテントの張り方などを講義。そのほかツエルトザックやコンロなどの使い方などに続いて簡単なロープワークの講習。シュリングと合わせていろいろな使い方、そんな中で今日は最低これだけでも覚えて帰ってと言われ、ブーリングを真剣に稽古する。

そのあとは楽しみのキャンプ食。遠江さんの作ったちょっとリッチな野営食でビールもすすみ、順番に今後の山登りの抱負など披露。たくさんの山の歌などを歌って賑やかな懇親会であった。

翌日(１５日)の登山は鋸山を予定していたが、雨上がりで岩場歩きが危険なため千灯岳に変更。車が多いので大田村支所に置いて、６台で登山口のある赤根へ移動。３台を不動岩登山口に回して赤根口から登山開始。１時間２０分あまりで登頂。受講者はみんな初めての山なので大喜びだ。集合写真を撮って１０時４０分下山開始で不動岩をめざす。山頂直下のスギ林の急斜面は雨上がりなのでいっそう滑りやすい。慎重な足取りでゆっくり下り、林道に出たらもう終わったと思っていると、それから不動岩までまだ遠い。幾つもの緩いアップダウンの稜線歩きで１２時２０分到着。無人の不動茶屋の中をお借りしてゆっくり弁当を頂く。そして帰りは大田村支所で解散式。

(千灯岳山頂にて)

帰りの車窓から、鋸山の上空をホバーリングするヘリが見えていた。滑落事故があったらしい。雨後の鋸山の岩場歩きを止め、千灯岳に変更の決断には受講者から称賛の声が聞かれた。

二回目の実践講座は１２月１９日(土)２０日(日)九重山の冬山体験だ。午前８時３０分に長者原に集合した受講者は５人と、去年の登山教室受講者１名。午前９時前に出発し、まずは下泉水山をめざす。支部役員４名が引率。冬山体験だが暖冬で雪がないので予定より速いペースで登る。下泉水の岩で景色を楽しんだあと上泉水へ。天気は良いが風が強くて冷たい。途中の大崩の辻分岐付近の日だまりの風の弱い窪みを見つけて昼食休憩。黒岩山でも青空の下３６０度の展望。わずかに雪の残る山頂で記念写真。そして下山。牧の戸

(黒岩山山頂にて)

温泉へ遊歩道の下りは雪がないので、コンクリート舗装が足に応える。

午後２時３０分にはみんなヒュッテについて早速温泉入り、そのあと時間つぶしに支部長持参の九重山紹介のＤＶＤなどを見る。６時からヒュッテのオーナー手作りのご馳走で和やかな懇親会となる。しかし今夜は山の唄が出ないままに終宴となった。

２０日(日)も天気は上々。朝の外気温度は氷点下６度で風はかなり強い。午前８時にヒュッテ前を出発。ヒュッテから大曲までの道は、通る人がほとんどないので雪があればラッセルの行軍だが、今日は落ち葉を踏みながら歩く。硫黄鉱山の車道に出ると吹きさらしの風が痛いほど。三俣山を見ながら歩いていく。露岩の斜面をジグザグ登りでスガモリ越。予定より３０分も早い到着。風の通り道になるこの峠は北風が冷たい。

一休みして三俣山へ。急斜面を登り詰めれば西峰だ。雪の多い時にはここでＵターンだった。希望を聞くとみんな目の前にそびえる本峰にいきたいという。ならば再出発。緩く下って本峰への急登、最後は緩やか登りで回り込むと三角点のある本峰だ。

(三俣山山頂にて)

やや霞っているが３６０度の遠望で、大分市街地が

霞んで見える。槇山や英彦山なども彼方に・・・。しかし風が強くて冷たい。記念写真を撮ったら下山開始。スガモリ越まで下って昼食だ。ヒュッテでもらったおにぎり弁当のおにぎりの大きいこと。とても二つは食べれない。腹ごしらえを終えると下山再開。

午後２時３０分くじゅうヒュッテに着いて、玄関前で解散式。今後の登山活動と、会友への加入の誘いも呼びかけ、９月から４ヶ月にわたる今年の登山入門教室の全日程を終了した。

ＪＡＣ参加者

（１１月）：加藤、興田、飯田、木本、遠江

（１２月）：加藤、興田、飯田、佐藤、木本、中野

個人投稿

より安全な登山のために N019
『屏風岩の救出、北岳バットレスの事故』

安 東 桂 三　(9193)

本年夏に少し気になる二つの山岳遭難事故が起こりました。一つは北アルプス穂高連峰の屏風岩、もう一つは南アルプス北岳バットレスで、いずれもクライミング中でした。

最近の山岳遭難は中高年登山者の道迷いが一番多く、次はハイキング中の滑落。滑落も道迷いに起因し、リカバー中の滑落も多い。とにかく地図が読めないとか人に連れられ登山が多く、レベルの低い山岳事故が多かった。

かっての山岳事故とはクライミング中とか積雪期の事故とかが多かったが、最近は事故の形態が上記のようにハイキングの事故が多くなっていた中でのクライミング事故が起こったことに少し考えさせられました。

屏風岩の滑落事故

メディアによると東京都の男性 64 歳と埼玉県の男性 62 歳のパーティが屏風岩をクライミング中に一人が転落し、宙吊りになり動けなくなり救出依頼し、23 時間後 29 時間後に救出されたと言う。二人はザイルにつながり 50mの間隔があったと言う。

いくつかのメディアを検索しても上記のような状況報告でした。そこからなぜ事故に至ったかを推察しました。実際その場にいないので正しいことか否かは解りませんが、いくつかの問題を考えました。まず屏風岩のどこかどのルートか?について。ＴＶでヘリコプターの映像が出ていましたので、この二名は屏風岩東壁の右端の東稜ルートを登っていたことがすぐに判りました。

屏風岩の高さは約600m、そのクライミングルートの中で一番やさしいのが東稜。そこにシニア世代の２人が取り付いた。シニア世代ならば若い時からクライミングをしていた可能性もあるが、中年になってクライミングを始めた可能性もある。また屏風岩東稜は転落しても決して宙吊りになるようなルートではない。いずれのメディアでも宙吊りの表現を使っていたがこれは表現間違い。また転落の表現もすこしニュアンスが異なると思いました。

二人が50m程離れていたと言うことについて。まず現在のクライミングでは、通常50mロープを使うので、彼らもそれを使っていたと推察するといくつかの状況が考えられました。リードしていたものがいくらか登って滑落し、あるいは支点が抜けて落ちて確保しているものを通りすぎて50m下で止まった。これは考えられない。その状況ではいくつかの支点はすべて抜けて二人とも大きなダメージを受けてしまう。でも彼らはあまりダメージを受けてない様子。

考えられるのはセカンドが登っているときに、何らかのアクシデント（支点が抜ける、あるいは単に落ちる）があり、50m離れてしまった。でもその場合はセカンドはまた登れば良いわけで、それが出来ていない。若いころからクライミングをしてシニアになったクライマーなら、フリクションヒッチ（プルージック結び）などで抜けた支点（ボルトなど）の箇所を通過しまた登る技術を知っているはず。その技術を知らないと言うことは長年クライミングをしていなく、せいぜい10 年か20 年前から始めたと言うことが推察される。

昔は自然の岩を登ることからクライミングが始まったが、現在では人工的な岩あるいは室内壁を登ることから始まることが多い。それで昔のクライマーはいろいろな技術を知っていた。今ではクライミングシューズを履き、安全を確保された岩（人工壁）をムーブで登る。

少なくとも 50m下にいたセカンドはいくつかの技術を知らなかった可能性があった。また50m上のトップは肩を脱臼していたと言う。これは確保中にパートナーの滑落を止めようとして、脱臼と言うアクシデントにあったと思われる。基本的にトップ（リードしている者）がセカンドを確保する場合は支点ビレイをする。決してボディビレイはしない。それで脱臼とは不可解なことで、ボディビレイを

していたか、支点ビレイがうまくいかなっかった可能性がある。トップが脱臼をしても落ちたセカンドはトップの処まで登り、二人で対処できたレスキュウがあったかもしれない。

北岳バットレスの事故

これは兵庫県の57歳男性と60歳の女性が、クライミング中に、標高3000m付近から200m滑落し、二人とも亡くなったと言う。これは山岳会の７名での山行でした。男性は15年のクライミング歴、女性は8年のクライミング歴で男性がリードしていたらしい。最初に男性が落ちて、続いて女性が落ちたと言う。二人は1本のロープで結びあっていた。

山岳会所属と言い、また７名でのクライミング合宿が出来ると言うことから、正しい技術は持っていて、盛んな山岳会だと思うがやはり滑落と確保が原因の事故と思う。リードしている男性がいくつかの支点(ハーケン、ボルト)にロープを通したか、あるいは、支点にロープを通す前に(登りだしてすぐに)滑落し、確保している女性が一度止めたがいくつかの支点がすべて崩壊し、女性の自己確保(セルフビレイ)が崩壊し二人とも落ちた。あるいは確保できずに男性の滑落スピードが増し、同様にいくつかの支点の崩壊と自己確保の崩壊で、二人とも落ちたことが考えられた。

北岳バットレスは昔より多くのクライマーが登り、確保するテラスには多くの支点が設置されている。彼らがどのルートを登っていたかは良く判らないが、支点の安全性が問題ならいくつもの支点からビレイを取り、荷重の分散をすることが可能と思う。男性が登り、それを女性が確保する場合体重差が問題となる場合がある。一般的に男性の方が体重の重たいことが考えられ、その体重差があればあるほど、正確な確保が要求される。

残念なことになってしまったと思う。大分のゲレンデでも、あるいは宮崎の比叡山でもクライミング事故は同様に起こる。正しい状況判断と正しい技術は必ず必要となる。この夏のクライミング事故について考察した。我々もシニア、安全のため楽しいクライミングを末永くするため必死にやるべきことをやろう。

ペンリレー・第１９回

分岐点の奥穂高登山

中島洋祐（14963）

人生には偶然が連続し、数回のターニング・ポイント（分岐点）があり、生き方・考え方は変わるように思われる。誕生・成長の家庭環境、入学試験、職業選択、結婚等である。私にも幾つかのターニィング・ポイントがあって、生き方・考え方が変わってきた。何事にも熱中出来ない性格の私が『登山』に興味を持ち、登山日を心待ちにしているのは奥穂高登山からである。加藤英彦会長に誘われ、北アルプス奥穂高に登ったのは６９歳の時だった。それまでは久住や祖母山の登山や夏季のキャンプを高校生たちと楽しんでいた。

十数年前、定年退職となり、多忙な毎日から解放され、それからの日々をどの様に過ごすかを考えていた。自分を向上させ、文化的で、健康的な活動を趣味にしようと。そのような時、ある結婚式に招待され、元同僚の音楽教師であるH先生の隣席となった。彼の薦めで、男声合唱団「南蛮コール」に入団した。そこで加藤氏と知り合いとなった。結婚式の参加がターニング・ポイントとなったのです。

それ以来、彼の指導の下、いろいろな山に登った。お陰で「大分１００山」も完登出来た。最も印象的だったのは前述の奥穂高登山である。彼と臼杵市在住のT氏が同行者であり、両人共、大学時代は山岳部員で経験豊富なベテラン登山家である。時期は涸沢カールが紅葉する十月初旬、ルートは上高地、横尾、涸沢、北穂高、奥穂高である。第１日目、上高地で雨になり、彼らの山仲間たちが待つ、横尾キャンプ場へ。彼らは涸沢まで雨の中、同行してくれた。雨中の行動は厳しいが、私には期待があり、雨中登山を十分に楽しんだ。まだ緑が多い登山ルートを早い足取りで登り、涸沢ヒュッテに到着。

登山客は想像以上に多く、部屋には敷き布団は４枚であるのに、翌朝目を覚ますと１２名が寝ていた。次の朝、小雨

だったが天気は直ぐに回復した。早朝、奥穂高山頂を目指し行動開始。岩場のテント村を通り、パノラマラインを歩き、落石の起こり易いザイテングラートを登った。穂高山荘経由で岩の登山道をはい上り、奥穂高(3190m)の山頂へ到着。頂上からの3,000mの山々は眺望は筆舌に尽くしがたい。稜線には槍ヶ岳、前穂高、北穂高が、立山連峰は山腹に雪渓を残し、白い模様を描いていた。遠方には優雅な富士山の姿も。これが最初のアルプス登山であった。翌朝、明るくなる前から山小屋は騒々しかった。

此の時期、登山客が期待しているのは奥穂高、北穂高、涸沢槍等の山々、涸沢カール全体がモルゲンロート現象でピンク色になる瞬間ある。涸沢カールに宿泊者の「ウオー！」の声がわき上がった。ナナカマドの赤、ダテカンバの黄色の葉、這い松の緑、残雪の白色のコントラストが更に美しさを増していた。「涸沢ヒュッテ」のパンフに「涸沢の紅葉を見ずして穂高を語るなかれ。」と書かれているが、まさに良く表現されたフレイズである。私に登山を熱中させたのはこの一瞬の景色であった。

その以後毎年夏の北・南アルプスに登ってきたが、そんな光景を見たい願望からである。これからも健康である限り、南・北アルプスをはじめ全国の山々に登りたい。多くの山仲間と知り合い、自然の厳しさを体験したい。同時に自然の美しさを堪能したい。７４歳の私には残された人生は少ないが、今後も山登りで健康を増進し、健康寿命を延ばし、自由な山行を楽しみたいものである。

次回のペン・リレーは木本義雄会員(12019)にお願いしました。お楽しみに。

３等三角点・緩木山と高城祉

三角点と山城探検シリーズ第１６回

安 部 可 人　（友11）

入田湧水が近い。入田宗和は父親誠が反乱の罪で自刃させられ鶴賀牟礼城を没収されて、やがて落ち目の宗麟を離れ、島津方となりました。「大分百山」では、「緩木山砦、島津に内応した入田宗和が大友に攻められて、（神原）城を退き、兵6000人で立て籠もった」とあり、確かに宗和は心配したが、宗麟には当時攻める兵力はもはやなかった(宗和も６０人ぐらいの兵士か)。「高源寺を宗麟が焼き討ちした」とありますが、疑問です。緩木山登山の帰りに緩木神社に立ち寄り、社殿の裏山を歩きました。東側の緩木川沿いの「切岸」、西は「横堀」、中央に「佐田豊前守（常任）安部重晴の墓」を発見し、南北に長く広い宿坊跡の台地には島津の大軍が宿営したと、私は信じます。

その墓。後胤某氏が文久二年(1862)建立と読めて以下「佐田常任は志賀親次岡城の臣、島津軍起ル、佐田常任・阿南勘解之丞など高城ヲ守ビスときニ、島津義弘攻め囲み常任奮闘戦死シ、(事実でしょう)」

研修センター前の大正時代の石碑「緩木城址ニハ中尾出雲守盛行の墳墓アル・・・」とあり、元宮近くの五輪塔・石の塔が中尾氏の墳墓かもしれない(写真)。

１．**高城**　高源寺から広域農道を神原へ向かい、最初に坂を上り詰めた地点に地籍点の白柱をみて、駐車します。草地に道はあり、すぐ消えます。３分で照葉樹林の尾根となり、いきなりの巨石の坂には唖然としたが、同行の小松さんがロープを落してくれアッセンダーを使って楽に登れました（下山は懸垂下降)。距離８００m高度差２００mを１時間２０分で図根三角点のある広い本丸７８０に着きました。緩木山が見えるだけです。この尾根は、標高点・８４３を経由して緩木山に続いています。この台地が県教委の縄張り図のある高城址です。高源寺に着陣した島津義弘はまずこの高城を攻撃し、志賀親次の家臣佐田・阿南（安倍氏）は水源を絶たれて、戦死しました。本丸さきには、上から来る敵にそなえて「堀切」が３つあり(写真)、

これは難攻不落の山城です。その先はもう恐ろしくて行けません。（２日後、久留米の男性６３歳が「越敷岳」で転落死しました）（H27.４．１６実行）

２．**緩木山登山**　10 数年ぶりです。登山届けして緩木城林道を奥の砂防ダムで駐車します。東方向へ植林の谷間歩きは楽しく４００m登れば柿色の案内板分岐点（７５０）です。右へ、ここから厳しい急坂になり南方向に変化して、やがて恐ろしい大岸壁にぶち当りました。岩壁の下の 10 数メートル間のトラバースは小径が流れ崩れ、単独行高齢者には危険ですから、あっさり止めました（高度８３０mの地点）。

（H２７．１．１６実行）　　地形図「豊後柏原」

写真　石の塔（佐藤昭博撮影）高城の堀切（安部撮影）

私の無名山ガイドブック N059

八丁越(1056.2m)・奥土岩(666.0m)

飯田勝之　（10912）

奥岳川源流域の三角点

大野川支流の奥岳川の源流域の谷間は言うまでもなく、母・傾山系の登山基地が幾つもあるところだ。この源流を取り囲むように祖母山を頂点に、南から東に傾山まで至る縦走路の稜線はさらに三坊主から奥天上、日向山、帯迫山へと続く、片や北東に延びる障子尾根は大障子岩、前障子の岩峰を経て、倉木山から俵山へと続く。この長い稜線に囲まれた源流域の谷間に向けては、主稜線から無数の支稜線が下り落ちており、その途中には幾つもの三角点が置かれている。それらは一応「点名」があるもののほとんど無名の小ピークである。その中には結構登りごたえがあり、読図しながら道なき斜面を登りつくとその達成感もひとしおである。そんな無名の小ピークのいくつかを紹介しよう。今回は下記の二点である。

八丁越

八丁越といえば、大障子岩の西にあり、竹田市神原最奥の白水と尾平をつなぐ仙道の峠の名である。しかし、ここで言う点名「八丁越」は大障子岩から南に派生し、奥岳川に落ち込む支稜線のちょうど中ほどにあって、稜線の肩のように張り出した小さなコブである。

ここへ登るには県道７号（緒方高千穂線）の尾平の手前にある八丁越の峠に至る登山道の入り口がよい。入り口は林道で大障子岩登山口の標識がある。砂防ダムの工事のためにつくられた、やや荒れているこの林道は最上部のダムまで続いているが、県道から９００mほどのところの、緩い左カーブの右手の沢がとりつき点によい。

沢に入ってすぐ右手上のスギ林に上がり、そのまま斜面を直登していくと１５分ほどで、右手の上方が小さな稜線状となっているのでそれをめざす。この稜線は照葉樹の多い自然林に覆われて、登るのにここちよい。急斜面を直登していくと、林道から約１時間２０分ほどで稜線上のコンタ９７０mの台地に達する。

稜線の東斜面はヒノキで、小さく下って再び急斜面の登りにとなると天然林となる。その後数分ごとに小さな台地状の平坦地を過ぎて、林道から約１時間４０分ほどでやや明るく伐り開かれた台地に達することができる。そこは稜線上のわずかに盛り上がった小ピークで、その中央に４等三角点がある。ふり返ると古祖母から傾山にかけての展望が開けて、背後は大障子岩に至る稜線の急斜面が被さってくる。

奥土岩

大障子岩から南にせり出した支稜線は、すぐに二つに分かれ、南は前記の八丁越三角点へ、もう一つは南東に分派し、曲がりくねって土岩の小集落へ落ち込んでいる。この小稜線の上にあるのが奥土岩である。

建男社から２.７ｋmほどで左に奥岳川を渡る橋を見て、さらに１ｋmほど行くと土岩バス停がある。バス停から右（北）に入るコンクリート舗装の車道があり、この道はすぐ先の民家の横を通って約２００m先で右にカーブして橋を渡る。その橋の直前のカーブ地点から左の斜面にとりつくとよい。

シイの木の斜面を登るとヒノキの植林地の中の登りとなり、１０分あまり登ると広葉樹の稜線となる。かなり急な稜線をひたすら登り３０分あまりで岩峰の小ピークに達する。岩峰からは奥岳川の谷を隔てて本谷山の長大な稜線を望むことができる。少し下ると両側が切れ落ちた馬の背状の稜線で、その先は再び急な稜線登りとなる。右（北）斜面がスギの植林地、南は中低木の灌木のブッシュで、その境界のヤブを分けながら登ると狭い稜線上の少し平らな場所に達する。東西にシカ避けのネットが張られて、そのネットの下に三角点がある。低い割には登頂感の味わえる登りである。

地形図：2万5千分の1「小原」「見立」

参考コースタイム

☆県道→２０分→沢→８０分→稜線の台地→２０分→八丁越三角点

☆林道→４０分→岩峰→２０分→奥土岩三角点

八丁越（左）と奥土岩（右）

会 務 報 告

支部長会議報告

支部長　加 藤 英 彦（8765）

日時、平成27年12月5日(土)10時30～12時30分
場所、京王プラザホテル４２階「高尾」
参加　全国32支部支部長、本部会長以下役員13人
議事　（1）会長挨拶　小林政志会長　元気な山岳会にしよう、活発な意見交換会に
（2）会務報告
1）秩父宮山岳賞　平出和也氏「世界的な山岳登攀と独自の技法による撮影実績」
2）名誉会員　該当者なし
3)新永年会員36名　うち東九州支の部姫野和記さん(5903) 佐藤告幸さん(6062) 2名の名前あり。
4）ネパール大地震義捐金について、会員から677万円　合計２２百万贈呈した。
5）マナスル登頂60周年記念事業について、来年5月ネパールにて予定している
6）登山道情報の取得と国土地理院への提供　複数のデーターが集まれば地図の訂正がきる。
7）「支部に関する規定」の改正　従来、支部所属に関する届出は本人から支部へ提出する仕組みとなっていたが会員の支部への所属は支部において責任をもって管理する
（3）支部助成金及び新入会員報奨金について、28年度から支部事業補助を現行の一人当たり1,500円から1,300円に減額新入会員報奨金を一人当たり4,000円とする。
（4）再生委員会にて検討された「準会員」制度について報告がありこれに基づいて意見交換があった。
要するに正会員ではない準会員制度を作ってそこで会員を増やす受け皿を作るという制度の提案である。
・入会金というハードルがあるので準会員の入会金は５０００円にする。
・年会費は６０００円。・紹介会員一人。
・会報「山」は郵送するが機関誌「山岳」は郵送しない。希望者のみ有料販売とする。
・登山講座参加できる。
・会の山行は原則参加できる。
・総会は出席できない。
・団体登山保険には加入できる。
・山研等の施設は利用できる。
・会員証発行するがバッジは支給しない。
・３年間以内に正会員に移行しなければならない。
・各支部の現在の会友・支部友制度は現状通り残す。・・・等々の案で、まだ提案の段階で決定まではまだ時間が必要である。

創立110周年記念式典・祝賀晩餐会報告

支部長　加 藤 英 彦（8765）

日本山岳会創立１１０周年記念式典・祝賀晩餐会が12月5日(土)東京・京王プラザホテルにて開かれ、皇太子殿下がお忙しいご公務のなか講演会・記念式典と参加されました。566人の会員が参加し、新たなるページを飾る意義ある祝賀会であり会の偉大な過去の業績を振り返るとともに、さらなる発展を誓った行事となった。

第一部　記念式典

会場には６０ものテーブルが並び山名が表示された。私はD列―2「伊吹山」のテーブルを指名されテーブルマスターを務めた。混乱をさけるためすべて指定された席となり私のテーブルは１０名全員我が東九州支部の会員でしめられた。
物故者への黙祷　物故会員５５人に対して黙祷した。幸い今年は東九州支部から物故者はいませんでした。
会長挨拶、小林会長の開会の挨拶
来賓挨拶　谷垣禎一市、八木原國明氏　両名と他の来賓１５名の紹介
第１７回秩父宮記念山岳賞授与　平出和也氏
１１０周年記念事業の報告
ここまでで記念式典が終了し皇太子殿下は退席されま

したが、その前に行われた記念講演会の最後の部「禁断の南チベット」中村保会員の講演会には皇太子殿下が参加されて熱心にお聴きになっていました。

第2部　記念晩餐会

会長挨拶、新永年会員顕彰、代表挨拶。神崎忠男氏　東九州支部の２氏［姫野和記、佐藤告幸］が新しく永年会員の資格を得て名簿に紹介された、当日36名のうち9名が出席された。東九州支部の出席した佐藤告幸会員も壇上にて皆さんからの温かい拍手を祝福を受けた。新入会員紹介、代表挨拶　益子穂高氏　新入会員232人のうち当日出席された48人の方が壇上に上がって祝福された、東九州支部からは（宮原照昭、渡辺和子、工藤吉子、土屋多喜子）、以上４名の方々が参加し感激に浸った。

学生部男子海外登山隊　代表挨拶　真下孝典氏（青山学院大学４年）

鏡開き　恒例の代表物６人での鏡開き

そして森前会長の音頭で乾杯して開宴、美味しい料理となった。各テーブルでの歓談、写真撮影、私のテーブルは全員が東九州支部員で自己紹介をすることもなく皆さんが料理とお酒、それにこの雰囲気に浸ったひと時となった。

（壇上での記念写真：中央小林会長、後列中央重富氏）

支部の紹介では全員が立って手をふって拍手にこたえた。支部からの参加は15名と過去最多の参加となった。毎年参加者が増加しており皆さんのご協力に感謝する次第です。会員相互の懇談の場ともなっているところで懐かしい語らいがあちこちからきこえた。最後まで盛り上がったそして格調高い会は読き、名残り惜しみながらも閉会となった。（20時40分）、また来年も参加ください。そしてまだ参加されてない方も一度はこの雰囲気を味わってみてください。きっと入会してよかったなと思うことでしょう。

終了後も支部の参加８名は場所を変えての懇親の席を設け東京の夜を楽しんだ時間となった

東九州支部からの参加者・・佐藤告幸、星子貞夫、西孝子、加藤英彦、飯田勝之、木本義雄　管泰三、佐藤壮悟、阿部幸子、浅野総一、若月美智子、宮原照昭、渡辺和子、工藤吉子、土屋多喜子

富士五湖のパノラマ台へ

飯田勝之（10912）

１２月６日、年次晩餐会翌日の恒例の記念山行、今回は富士五湖の精進湖と本栖湖の間にあるパノラマ台を歩くコースだ。東九州支部からは５名が参加した。7時50分に新宿西口の工学院大学前に集合ということで、私は泊まっていた川崎の娘の家を6時40分に出発。午前8時に貸し切りバスは出発。

１１０周年記念の山行とあって例年より参加者が多く、２台のバスがほぼ満員の94名だとのこと。車内で配られたのは、110周年の記念山行のため特別作成の手ぬぐい。この山行参加者だけが頂けるという特典に浴した。

バスは中央自動車道大月から河口湖へ、さらに西湖畔から青木ヶ原を横切って10時過ぎに精進湖畔の登山口へ到着。班編制のリボンを付けて10時20分出発。広葉落葉樹の中の明るくて、よく踏み磨かれた道を100人近い団体で、ごくゆっくりしたペースの登山だ。11時30分、パノラマ台に到着。青空の下、眼下に精進湖、その向こうに富士山。彼方には三ツ峠山、大菩薩峰から雲取山方面、西には布引山脈の後ろに荒川三山や赤石岳の真っ白な峰が見える。ここで昼食休憩。

（パノラマ台で・後方は富士山）

12時20分出発。約1時間の緩やかな稜線歩きやがて中の倉峠の展望台へ着く。ここは1000円札の裏側に描かれている富士の景色が描かれた場所で有名だ。（そう言えば昔、500円札に描かれてる富士を見るため、大菩薩峠から小金沢尾根を歩いて雁ヶ腹摺山まで歩いたことがある）

狭い展望台なので交代で景色を見る。そして、急斜面のジグザグ下り３０分で本栖湖畔のバス乗り場へ２時過ぎに到着。帰りのバスはたいした渋滞に巻き込まれることもなく、予定より早く午後５時過ぎには新宿に着いた。好天に恵まれ、寒さもほとんど感じなく、絶好の登山日和ですばらしい景色を堪能できた楽しい一日であった。

参加者：星子、飯田、佐藤(壮)、阿部、若月

特別寄稿

槍ヶ岳北鎌尾根紀行

星子貞夫(8582)

1996年4月27日～5月2日

メンバー　星子、池辺、児玉、中野

槍ケ岳より北に伸びる北鎌尾根は日本の登山史上実に話題の多い尾根である。加藤文太郎の遭難は特に有名である。また山小屋等の発達した現在でも、全コース幕営が必要であり、特に積雪期においては20ｋｇ以上の荷物のボッカに加えてルートは急傾斜の雪壁、岩壁、雪稜、岩稜の連続であり、イスケープルートも無く、ザイルワークをはじめ天気図による気象の判断まで所謂登山の総合力を要求される一流の尾根である。

今年は例年になく雪が多く例年の二倍位あり、気温が高くなって雪面が腐ってくるので行動は午前中に限られた。全行程中最初の3日間は晴天であったが、遂に最後の1日は午前6時頃よりガスと雨と雪と霙が交互にあり、風が弱かったので幸であったが、またしても目標の槍の穂を見る事は出来なかった。

4月28日　晴れ

6時頃タクシーで七倉の登山案内所に着く。5月1日からは高瀬ダムの天場まで車が入るが今日はここまでである。案内所で湯茶の接待を受け登山届を提出し、朝食をすまして出発する。七倉沢の橋を渡り「山の神隧道」を通り高瀬川の左岸を高瀬ダムに向かってこの号の発刊となった。今回はひときわ感慨あり。

歩く。ダムは東洋一のロック・フィールドでそのなかを道はジグザクについている。

体力を消耗しないようにゆっくり歩く。高瀬ダムの湖面を右手に見ながら右岸を約一時間半歩いた頃やがて流れは小川となる。此処から道は車道から登山道となり雪道となる。夏でも湯俣川出会いの晴嵐荘に行くにはダムの天場から歩かなければならないのである。所々木橋が架けてあるが腐って壊れそうな所もある。前日2～3パーティが入山し、今日も一人先行した者がいて雪の上に点々とトレースが続いている。

12時20分遂に晴嵐荘に着く。途中から河原を直行した為、湯俣荘は屋根の部分をちょっと見ただけだった。先行した一人に追いついて道を確認する。彼は単独で硫黄尾根を登りにきたが雪が多いので断念したとのことである。

晴嵐荘の奥、湯俣川の上流は自然に温泉が出るところで、夏になるとスコップを持った観光客が訪れて、河原に穴を掘って浴槽を作り露天風呂を楽しむそうである。この湯俣川と水俣川の出会いの下流に小さなダムがあり、そのエプロンの下を対岸に渡り発電所の間を通って水俣川の右岸にでる。水は手を入れると温かく温泉の匂いがする。猿が数ひき川の辺で遊んでいる。我々が行くと道をあけてくれる。ダムの上流、水俣川に吊橋があり、これを渡って水俣川の左岸にうつ

る。此処から千天出会いまで左岸側を高巻、へつり、の連続で残置ザイルや木の根に掴まっての難行軍である。千天の出会い下に朽ちた吊橋があるが危険なのでその上流のスノーブリッジを右岸に渡る。眼下に逆巻く激流を見下ろしながら最後の高巻を終えると天上沢である。

さきに水俣川に移って間もなく、ザイルを担いだ空身の青年が一人で下ってくるのに出会う。聞けば、前日に入山した横浜の三人パーティのリーダーである。

P2 の登りで遭難があって、高瀬ダムまで救助の電話をかけに行くと言う。遭難者は写真目的の単独行で、その日彼ら三人の後からP2 の上部岩壁を登攀中、掴んだ残置シュリンゲが切れて、そのまま約 300m を転落したとのことである。初日から不気味で緊張させられる。

千天出会を過ぎた頃時刻も遅くなったのでP2 取り付き点の手前で水が汲めそうな場所を見つけテントを設営する。雪の斜面を削り雪面を均して踏み固め約一時間の作業で出来上がる。作業中P2 上空でヘリによる遭難搬送が終わった。北鎌尾根山行の第一夜は雪にうもれたダケカンバやシラビソの林の中で、空は満天の星であつた。

4 月29 日　晴れ

初日の疲れもあり少し遅いが 7 時出発となる。約 10 分位も急な雪面を登って天上川を左岸に渡ればP2 取り付き点にでた。昨日の遭難者の装備がシラビソの大木にくくりつけてある。横浜の二人がリーダーの帰りを待っている。此処で彼らに道を確認し、いよいよ40 度の雪壁の登りにかかる。

雪壁が終わって岩壁にかかる頃、名古屋の若者5 人グループが追いついてくる。聞けば晴嵐荘を五時に出発したとのことである。

岩壁では23Kg の荷物が体を岩壁から引き離す。岩は適当にホールドもあり、木の根も露出しているのでぐいぐい高度を稼ぐ。岩壁が過ぎ又雪面となった頃、傾斜もゆるくなり鞍部に着く。P2 である。此処で若者達に先を譲って我々はそのトレースに従う事にする。Ｐ３を過ぎてP4 にかかる頃から前方にP8 が大きく見え、トレースもはっきり見える。P4 からはP5、P6 が双頭峰のように見える。2 時にP5 の基部に着く。先行の名古屋組は此処で既にテント設営を終えて納まっている。前方P5 天上沢にデリケートなトラバースのトレースが見える。遥か右方はP8 である。この鞍部はテント２張りの広さである。名古屋組の後方上部にかろうじて設営する。あまり狭いのでP4 まで引き返そうかと思ったほどであった。

午後４ 時のNHK 気象通報で天気図を書く。994 ヘクトの低気圧が黄海の中央にあって毎時 20ｋｍで東北東に進んでいる。朝鮮半島は雨であるが日本列島は全国的に晴れている。太平洋高気圧の影響で気温も高く天気も良い。放送では明日は午後から 30%の降雨率である。低気圧の速度がもし早ければ明日は停滞もありうると考えて寝につく。さいわい夜は星空を眺める事が出来た。隣のテントからも健康な鼾が聞こえてきた。

4 月30 日　晴れ後曇り

午前５ 時出発の準備ができたが先行の名古屋の若者グループがP5 の基部でザイルをフイックスして一人づつトラバースにかかっている。少し待ったが我々は手前からアプザイレンしてP5 のトラバース・ルートに合流する。記録によると非常にデリケートなトラバースと言う事になっているが、以後次々に現れるトラバースもナイフリッジもすべてデリケートであり、特記する程のこともない。此処はトレースが深くかえって安心感があった。

P6 は千上側を巻く。出だしに残置ピトンがあり、星子の確保で児玉氏がザイル一杯までP6 を登り、フイックスして池辺、中野の順にプールジックでP6 を越える。P7 を二回のアプザイレンで下り、20ｍトラバルと、そこは懐かしの北鎌沢右俣である。此処で先行する名古屋グループのスリップ痕らしきものがある。皆慎重に下る。P8 への登りはP2 に次ぐ急傾斜である。先行組は既に登ってしまって姿も見えない。我々も小休止して P8 の登りにかかる。平均斜度 30.5°位だが一部 80°の岩の露出があり慎重に登る。P9 は岩峰である。ここから独標の全容が見える。先行隊は既に独標に取り付いている。トップは頂点に達したが、ラストは取り付き点でジッヘルしている。取り付き点が難所であるらしい。迂回するトラバース・ルートにはトレースがない。雪も多く夏の経験ではあまりにも傾斜が急である。午後１時15 分露岩と雪のナイフエッジを越えて独標の基部に着く。独標のトラバース・ルートを探って見たが矢張りトレースはない。雪が多いので直登したほうが楽なようである。星子の疲労が激しく、独標を過ぎれば北鎌平までテント設営地の確保が出来るか不安なので此処で行動を打ち切ることにする。幸な事に雪洞とテントの跡地があり、それを広げて設営する。設営が終わった頃後続の４ 人組が到着し、隣にテントを張る。このころより風が出て降雪をみる。

午後10 時気象通報で天気図を書く。昨日の低気圧は朝鮮半島の真上に移動し相変わらず進行が遅い。このぶんだと明日午前中に肩に小屋に逃げ込めば嵐に合わずに済みそうだ。放送では長野県北部は午前中 30%午後50%雨の予報を出している。明朝２時起床、４ 時出発という事にしてシュラフにもぐる。夜中かなり風が出て時々雪、雨のよく判らない天気であつた。

５月１日

東の空が真っ赤に染まり喜作新道の稜線が茜色に染まる頃、児玉氏をトップに独標基部の垂直の雪のルンゼをのぼる。トップとラストでザイルをフィクスして池辺、中野がプールジックでコンテでのぼる。最後に星子がのぼる。下部は快適に登ったが、上部の乗越に来て、雪が柔らかくピックが全くきかない。右側の這松の根に頼って稜線に出る。後は雪と岩のミックスの斜面であり、最後は緩やかな雪面を上りきって独標頂上に立つ。あこがれの槍ケ岳の姿が目に飛び込んで来る。

この頃より雨と雪が交互に降り出し、槍の姿もついにガスの中に消えてしまった。雨の準備をして、ゆっくり縦走にかかる。P11 の登りでハング気味の困難な岩場にぶつかり、それを迂回するために１時間のロスとなる。我々の後からくる、独標に達した後続の若者グループにはその事を知らせたので、結局彼らが先行する事になった。

北鎌平まではアップダウンの繰り返しで少しづつ高度を稼ぐ。ルートは片時も気を抜けない。P5 のトラバースと同じ様な所が幾らでも出てくる。トレースが雪庇の上に残っている。その雪庇が気温と自分の重みでベルグシュルンドが口を開けている。無意識にトレースをたどっていると一巻の終わりになりかねない。北鎌平は今までの緊張が解ける安心の場所である。ガスの為周囲は何も見えない。平らな雪原にテント跡のブロックが残っている。風は南かぜであるが槍の穂の陰のため、あまりひどく感じない。先行の若者グループは此処で幕営している。のんびりと天候の回復を待って、晴れた槍の姿を楽しむつもりだろう。日数が許せば我々もそうしたいものだ。此処でカッパの下をはき完全武装で最後の登りにかかる。

最初の基部を星子がラッセルして次に中野に交代する。いよいよ最後の岩場にかかり児玉がトップで進む。秋に苦労して登攀したチムニーは左側を迂回して天上沢側のルンゼを的確にぐんぐん登って行く。ラストからはトップの姿は全く見えない。やがて明るい弾んだ声が上から響いてくる。次々に頂上に上がって完登の喜びに湧く。

この時既に天候は完全に雨になり、南側の下り斜面は吹き飛ばされそうな風である。慎重にアンザイレンして一人づつ槍の肩まで下った。

肩の小屋は我々を入れて12 人であつた。

おわり

お知らせ

月例山行のご案内

２月月例山行：五勇山(1662m)**・烏帽子岳**(1692.2m)(熊本県・宮崎県)

日　時：2月6日（土）～2月7日（日）
出　発：2月6日　午前6時30分出発

集合場所　大分駅上野の森口広場
※天候（特に雪）により行程が変更になる場合があり。
※冬装備が必須になります。
2月6日は民宿に泊まります（宿泊費8,500円）
参加申込は1月25日までに
リーダー：佐藤秀二(090-9607-6789)まで

3月月例山行：郡岳(825.8m)（長崎県）

日　時3月２７日(日)
出　発‥大分駅、上野の森口　午前６時30分
人数多ければ、レンタカー手配予定
装備　日帰りハイキング装備
参加申込は３月20日までに
リーダー：安東桂三（携帯　090-5727-9472）まで

4月月例山行：京丈山(597.8m)（熊本県）

日　時‥4月２４日(日)
出　発‥4月２４日　午前５時出発（日帰り日程なので早発ちとなります）
集合場所　大分駅上野の森口広場
参加申込は４月16日までに
リーダー：興田勝幸(0978-62-4351・090-9070-9407)まで
※カタクリの花をご期待

平成２８年度支部定期総会開催

支部規約第１５条第２項の規定により下記のとおり平成２８年度定期総会を開催しますので、ご参集下さい。

支部長　加　藤　英　彦

日時　４月１６日（土）午後６時より
場所　大分市府内町「コンパルホール」

公益社団法人としての事業報告や新年度事業計画などを決める、支部にとって一番大事な会議です。会員・会友の皆さん方には、あらかじめ予定しておいて、是非ご出席をよろしくお願いします。

第5回支部役員会の開催案内

平成２７年度第5回支部役員会を下記の通り開催しますので役員の方はご参集下さい。

日　時‥2月１７日（水）午後6時３０分より
場　所‥「コンパルホール」

後　記

・暖冬で九州の山では雪がなく、九州どころではなく伯耆大山や富士山に雪がないといわれるこの冬だったが、大寒入りを前にした頃からやっと冬らしくなってきた。由布岳や鶴見岳が白くなると、山から呼ばれているような気がして、休みが待ち遠しかった若き時代・・・。あれはいつ頃までだったのだろう。

・やっと白くなった峰を見ながら、今日は風が強すぎる、ちょっと寒すぎる、もう少し天気が良くなってから行こう、などと考える今日この頃。しかしやはり山に行き、山靴を履くと気が引き締まり、歩いていると心が澄みわたってくるのは、この不思議な魔力に魅せられて長年培ってきた魂のせいだろうか。

・前号に続き、青年部の話題。部が立ち上がり、動きはじめた。最初の山行報告も頂いた。次の山行も計画中で、まずは揃って祖母・傾の縦走やることを目標に、鍛錬登山を積んでいくとのこと。経験や体力などに違いがある人たちの集まりで、その活動も最初は一定の限界があろうと思われる。しかし、若さという武器。山では欠かせないバイタリティになるのは必定。一歩、一歩進んでほしいと念願する。

・支部報編集作業に没頭した一日、夕方になり今日はここまで、とＰＣ画面に起動中の編集に使用したアプリケーションやソフト、ネットなどの画面の☒を次々とクリックして切っている中、無意識にやってしまった編集中のワードの☒をクリック、いいですか？の問いにも無意識にＯＫ、その瞬間に「あっ」コンマ１秒の後でも、もう後の祭り。保存せずに切ってしまった。一日の苦労は一瞬にして水の泡とはこのことだ。そんなアクシデントを乗り越え、やっとこぎつけた今号の発刊。

（Ｋ・Ｉ）

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東 九 州 支 部 報　第７２号
２０１６年（平成２８年）１月２５日発行
発行者　加 藤 英 彦
編集者　飯 田 勝 之
発行所　事務局
〒874-0820 別府市原町５－１４　飯田勝之方
TEL・FAX　0977-21-3437
Email　jachigashi@leo.bbiq.jp